

「お前、俺のこと何やと思ってんの」

低く抑えた声が、鼓膜を震わせる。

気づいたときには壁際まで追い詰められていて、私は目の前の友人を見上げることしかできなかった。いつも穏やかに笑っている彼が、こんな顔をするなんて。

「ずっと我慢してきたんや」

額に落ちた前髪の隙間から覗く瞳が、私を射抜く。

「お前に彼氏おったときも、東京行ったときも。ずっと、ずっと」
声が、出ない。彼の指が顎を掴んで、無理やり視線を固定される。

「やのに婚活？ 俺の目の前で他の男探すって？」

静かな声なのに、押さえつけられた怒りがびりびりと伝わってくる。

「……………待っ……………て……………」

「もう友達でおられへんくなってもええ」

唇が降りてくる。

「今日でわからせたる。お前は俺のもんや」

限界だった。

半年間勤めたブラック企業。終電帰りの毎日に、上司からのパワハラ。セクハラを拒んだ日から始まった職場での孤立。そしてある朝、体が動かなくなつて——数日後に届いたのは、冷たい契約終了のメールだった。

社宅も追い出されることになった。貯金は少しだけならあるけど、実家に連絡したら確実に連れ戻される。

どこにも行き場がなくなった夜、社宅のベッドで膝を抱えていた。涙も出なかった。ただ、ぼんやりと天井を見つめていた。

そのとき、スマホが震えた。

画面に表示された名前——黒瀬陸。

大学時代からの友人。三ヶ月前に大阪から東京に異動してきたばかりの、大手商社勤めのエリート。

学生時代は対等だと思っていたのに、社会人になってからの差のつき方は残酷だった。ブラック企業勤めの私がキラキラした世界で活躍する陸の友人でいていいのか、ずっと迷っていた。

だから最近は連絡を取っていなかった。

(……でも、それがなんで今……)

震える指で、通話ボタンを押した。

『よう、久しぶり。元気しとる?』

いつもの軽い声。その声を耳にした途端、ぶわっと涙が溢れてきた。

『……は？ 泣いてるん？』

電話の向こうの陸はすぐに私の様子がおかしいことに気づいたらしい。

「……っ」

何か返さなきゃって思うのに、次から次へと涙が出てきてうまく応えられなかった。

『何があったん？ 言うてみ』

優しい声音でそう言われて、堰を切ったように、全部話してしまった。

会社のこと。クビになったこと。住む場所がなくなること。

電話越し、陸はずっと黙って聞いていた。

話し終わった後、短い沈黙があった。

『——今どこおるん？ 迎えに行くわ』

それだけ言うと、陸は電話を切った。

(……泣きそう)

友人の温かさに触れて、また涙が溢れた。

深夜、社宅の前に止まった車から降りてきた陸は、私の顔を見るなり眉をひそめた。

「……なんちゅう顔してんねん」

整った顔立ちに、いつもの余裕のある笑みはない。代わりに、眉間にわずかな皺が寄っていた。

「ごめん、こんな時間に……」

「謝らんでええし」

彼はそう言って、そつと腕を伸ばした。

強く引き寄せるわけでもなく、ただ、疲れ切った私をやさしく包み込む。

「よう頑張ったな」

（ずるい……そんなこと言われたら……）

その一言で、張りつめていたものが全部崩れた。

涙が止まらなかった。声を押し殺して泣く私の背中を、陸はずつと撫でていてくれた。

「今日は何も考えんでええ。うち、おいで」

こうやって抱きしめられるのは、大学で仲良くなってから初めてだった。

私は頷くことしかできなかった。

陸の住むマンションは、都心のタワーマンションの高層階だった。

「……すごいね」

（……私とは無縁の世界だ）

謙遜しているけど、商社のエリートコースはやっぱり違う。広いリビングに通されて、私はソファに沈み込んだ。

「とりあえず、これ食べ」

彼がキッチンから持ってきたのは、温かいおにぎりと味噌汁だった。

「コンビニので悪いけど、何も食ってへんやろ」

見透かされている。私は黙ってうなずいて、おにぎりを口に運んだ。塩気が舌に染みて、また涙が出そうになる。

「……ごめんね……ほんとに」

（……ほんと情けない）

こんなふうに迷惑をかけるつもりなんてなかったのに。

「やから、謝らんでええって」

陸は私の向かいに座って、静かにこちらを見つめた。

「今日はもう寝え。話は明日でええから」

その言葉に甘えて、精神的にも限界だった私は、いつの間にかそのままソファで眠りについていた。

翌朝、目が覚めたとき、見慣れない天井に一瞬だけ混乱した。すぐに昨夜のことを思い出して、私は身を起こす。

広々としたベッドルーム。私は陸のベッドで眠っていたらしい。

（……陸が運んでくれたんだよね？）

リビングに出ると、ソファで毛布にくるまった陸の姿があった。

「……ソファで寝たの？」

「ん？ ああ、起きたんか。おはよう」

寝起きの声で、陸はのそりと体を起こした。

「……運んでくれてありがとう。でも、私がソファで良かったのに

……」

「アホか。ボロボロのやつに変な気遣いさせるほど鬼ちゃうし」

彼は当然のように言って、キッチンへ向かった。

「朝飯、簡単なんでええか？」

「……うん」

用意してくれたトーストと目玉焼きを食べながら、私はおずおずと切り出した。

「あの……今日中にネカフェとか……探すから」

「は？ 何言うてんの」

「だって、いつまでも泊まるわけには……」

「仕事も住むところもないんやろ。決まるまでうちにおったらええやん」

「でも……」

「そんなすぐ行くところなんか見つからんやろ」

反論できなかった。実際、貯金があっても保証人もいない状態で部屋なんてすぐに借りられない。

「……迷惑じゃない？」

「迷惑やったら最初から泊めてへんわ」

それだけ言って、陸はコーヒーを啜った。

こうして、私は陸の家に居候することになった。

数日が経つと、少しずつ眠れるようになった。体調が戻ってくる
と、さすがに何もしないのは居心地が悪い。

「ご飯、私を作るよ。居候させてもらってるんだし」

「ええって、無理すんな」

「無理じゃないよ。これくらいさせて」

最初は渋っていた陸も、私が譲らないのを見て「ほんなら頼む
わ」と折れてくれた。

それから、私が夕食を作るようになった。

毎朝、出勤前の陸に「今日何食べたい？」と聞くのが日課になり、そして彼は、決まった時間にきっちり帰ってくる。

「……仕事忙しいのに、毎日早くない？」

「別にそんな忙しないで。定時で上がれる日も多いし」

嘘だ。激務で有名な商社勤務なのに、私が来てから残業している様子がほとんどない。冷蔵庫の中だって、私が来る前はほとんど空だったに違いない。真新しい調味料だけがやたら揃っているのが、逆に不自然だった。

（……私のために、調整してくれてるのかな）

嬉しいような、申し訳ないような。複雑な気持ちになる。

「それより、今日の肉じゃがめっちゃうまいな」

「ほんと？　よかった」

「お前、料理上手になったな。大学ん時、サークルの合宿で焦がしてばっかちやうかった？」

「あれは鍋がおかしかったの！ ……でもまああの頃よりは作れるようになったかも」

「そうなん？」

「うん、前に付き合ってた人が料理にうるさくて」

何気なく言った瞬間、陸の箸が一瞬だけ止まった。

「……へえ」

「毎回ダメ出しされてたから、必死で練習したんだよね。おかげで上達したけど」

「……」

返事がない。

（……あれ、なんか空気変わった？）

「陸？」

「——なあ、明日は何にするん？」

急に話題を変えられた。さっきまでと声のトーンが違う気がしたけど、気のせいだろうか。

「え、もう明日の話？」

「毎晩楽しみにしてんねん」

そう言って笑う顔は、いつもの陸だった。ほっとして、私も笑顔になる。

「……リクエストある？」

「お前の作るもんやったら何でもええよ」

「それが一番困るんだけど……」

「ほんなら、ハンバーグ」

「急に具体的になった」

「お前が何でもええって言うから」

軽口を叩き合いながら、食卓を囲む。こんな時間が続けばいいのにと、ふと思ってしまう自分がいた。

その夜、喉が渴いたので水を飲みになりビングに行こうとしたとき——廊下で風呂上がりの陸とばったり鉢合わせてしまった。

「うわっ」

「お」

腰にタオルを巻いただけの姿。

濡れた髪から雫が落ちて、鍛えられた胸板を伝っていく。

「……っ」

（わ、なんか、うわっ……）

「ん？ どした」

「な、なんでもない」

目を逸らしたつもりなのに、視線が勝手に陸の体を追ってしまう。

「……見すぎやで」

「見てないっ」

「めっちゃ見てたやん」

陸がにやりと笑った。

「まあ、ええ体やろ？」

「……っ、自分で言う？」

「事実やし。なあ、抱かれたなる？」

「っ……！ ばか！」

「あはは、冗談やって。顔真っ赤やん」

からかわれてると分かっているのに、胸がどきどきする。

「……早く服着てよ」

「はいはい」

彼が自室に消えるのを見届けてから、私は大きく息を吐いた。

（……なに動揺してるの、私）

友達の前なんて、見慣れてるはずなのに。大学するときだって、サークルの合宿とかで——いや、あのときは別に何も思わなかったのに。

（……意識、してる……？）

自分の心臓の音がうるさくて、しばらくその場から動けなかった。

週末の夜、陸が映画を見ようと言い出した。

「ホラーはやめてよ」

「分かってるって。お前ビビりやしな」

「ビビりじゃないし」

「大学ん時、肝試しで泣いてたやん」

「……な、泣いてないし。それにあれは不意打ちだったから」

結局、彼が選んだのは無難なアクション映画だった。ソファに並んで座って、テレビを眺める。

映画は面白かったはずなのに、途中から記憶がない。

気づいたら、視界が暗くなっていた。

「……ん」

頬に温もりを感じて重い瞼を開けると――

（……あれ、私……）

「起きた？」

すぐ近くから声がして、心臓が跳ねた。

陸の肩に、頭を預けていた。

「——っ！　ご、ごめん………！」

慌てて体を起こす。どれくらい寝てたんだろう。

「ええよ別に。よう寝てたな」

「なんで起こしてくれなかったの………」

「起こす方がかわいそうやろ」

陸はそう言うってから、意味深な視線を投げかけてきた。

「……まあ、そうやって無防備なん、俺の前だけにしときや」

いつもと違う、真っ直ぐな目。

「え………」

鼓動が速くなってくる。

「女誑しみたいなこと言わないでよー？」

私は誤魔化すようにわざと明るい声を出して言った。

「……悪かったな」

陸がふっと視線を外して、リモコンに手を伸ばす。

私は黙ってソファに座り直した。

（……なんだったんだろう、今の）

隣に座る陸の横顔を、盗み見るように見てしまう。

テレビの明かりに照らされた横顔は、いつも通りに見える。

（……私の勘違い？）

そう思ってテレビに視線を向けると――

「……まあ、俺の前が一番あかんねやけどな」

小さな声が聞こえた。

「……え？　どういう意味？」

「なんも」

聞き間違いだったのかもしれない。

心臓がばくばくとうるさくて、私はそれ以上何も聞けなかった。

いつの間にか、この居候生活にも慣れてしまっていた。自立しな
きやと動き出してはいるものの、陸の優しさに甘えてしまっている
自分もいる。

そんなある日、いつものように二人で食後のソファでくつろいで
いた私は、ふと気になったことを口にした。

「ねえ、陸ってさ」

「ん？」

「……昔からこうだったっけ」

「なにが？」

「世話焼きっていうか……なんていうか」

陸は一瞬だけテレビから視線を外して、私を見た。

「他の誰にもこんなことせえへんよ。お前にだけ」

さらりと言われて、また胸がどきっとする。

返す言葉が見つからないまま視線を逸らすと、彼は小さく笑った。

「……って言ったら、たいがいの女の子はオチるんやで？」

「……もう！ その口説き文句、私に使うのやめてよ！」

「でも、ドキッとしたんちゃう？」

バレてる。悔しくて、思わずクッションを投げつけた。

「……今さら陸なんかにときめくわけないでしょ」

「ほんまにー？」

「ほんまに！」

あえて関西弁で返してやる。

陸は私が投げつけるひらりとクッションを避けて、楽しそうに笑っている。

（……ほんとに、ずるい）

昔からこうだ。からかうのが上手くて、いつも私はペースを乱される。

「……まあでも、陸は大学ん時から女の子にモテてたもんね。調子乗るわけだ」

「別にモテてへんで」

「嘘つけ。サークルで何人に告白されてたのよ」

「知らん。興味なかったし」

陸は素っ気なくそう言って、テレビに視線を戻した。

その横顔を、なんとなく見つめてしまう。整った顔立ち。高い鼻。長いまつげ。

モテるのは知っていた。でも、言われてみれば彼女がいる姿を見たことがない。

「……陸っていつから彼女いないの？」

「……なんで急にそんなこと聞くん」

「いや、なんとなく……」

「……作らへんよ」

「なんで？」

陸は少し間を置いて、ぼそりと言った。

「俺、好きな子おるから」

心臓が、どくんと大きく鳴った。

（好きな子……いるんだ……）

当たり前だ。こんなにかっこよくて優しいのに、彼女や好きな人がいない方がおかしい。

でも、なんだろう。この胸のざわつきは。

「……え、誰？」

「秘密」

「えー、教えてよ」

「いやや。お前にだけは教えん」

「なんでよ……!？」

「なんでやろな」

はぐらかされてしまった。

でも気になる。すごく気になる。

私には教えてくれないってことは、私の知ってる子なのかもしれない。

「……どんな子なの？」

「どんな子……」

陸は少し考えるように宙を見て、それからぽつりと言った。

「……鈍感なやつ」

「鈍感？」

「めっちゃ鈍感。何回アピールしても気づかへん」

「それ……脈なしなんじゃないの」

冗談めかして言うのと、陸の表情が一瞬曇る。

「……かもな」

そして、小さく笑った。いつもと違う、どこか寂しそうな笑い方だった。

「……でも、諦められへんねん」

その声が、なぜか胸を締め付けた。

（陸がこんな顔するの、初めて見た。……そんな顔させる人がいるんだ）

陸はそれ以上何も言わず、チャンネルを変えた。

私は何か聞いてはいけないことを聞いてしまった気がして、それ以上追及できなかった。

（……なんで、こんな気持ちになるんだろ）

——私たちは、ただの友達なのに。

陸に好きな人がいることを知って、こんなにモヤモヤするなんて、おかしい。

陸の好きな人のことを考えさえしなければ、穏やかな日々が続い

ていた。そんなある夜——陸が残業で遅くなるとメッセージが来た。珍しいな、と思いながら、私は先にご飯を済ませてソファでテレビを見ていた。

玄関のドアが開いたのは、夜の十時過ぎのことだった。

「おかえり」

「ただいま。悪いな、遅なってもうたわ」

「ご飯、温め直すね」

「ありがとう」

陸がリビングに入ってきたとき、彼のポケットのスマホが鳴った。

「……ちよつと電話出てくるわ」

陸はそう言って、リビングを離れた。

廊下の方から、なにやら低い声が聞こえる。内容までは分からない。
い。

でも、ふいに笑い声が聞こえた。

楽しそうな、柔らかい声。

しばらくして戻ってきた陸は、何事もなかったようにソファに座った。

「ごめん、仕事の電話」

「……うん」

（——ほんとに仕事……？）

それにしても親密そうな雰囲気だった。

気になったけれど、私は何も聞けなかった。聞く権利なんて、友人だけの私にはないのだから。

その日から、陸が電話に出るたびに目で追うようになってしまった。

仕事柄なのか、電話がかかってくるが多かった。陸はいつも

少し離れた場所まで移動して話すから、内容までは聞こえない。

でも、時々聞こえる笑い声。柔らかい声のトーン。

仕事相手と話すそれではない気がするのは気のせいだろうか。

（……好きな人と話してるのかな）

陸の言っていた好きな人。鈍感なやつ、といつも飄々としている彼に切ない顔をさせる存在——私じゃない、誰か。

（……関係ないでしょ、私には）

こんなにお世話になってるんだから、むしろ応援しなきゃいけない立場だ。

そう思おうとするのに、陸の好きな人のことを考えると胸がぎゅっと締めつけられる。

——気づいたら、陸と目を合わせられなくなっていた。

「……なあ」

数日後の夕食時、陸が箸を止めた。

「最近、なんか怒ってへん？」

「……怒ってないよ」

「嘘やん。目え合わせてくれんし」

「……」

「俺、なんかした？」

陸が真っ直ぐこっちを見ている。

言えない。陸の毎日の電話が気になるなんて、言えるわけがない。

だって私は居候で、友達で、陸には好きな人がいて――

（……考えちゃだめ）

「……なんでもないよ」

「なんでもないことないやろ」

「ほんとに、なんでもないから」

無理やり笑って、箸を動かす。

陸はしばらく黙ってこっちを見ていた。

「……そっか」

いつもなら「嘘つけ」とか言って追及してくるのに、それ以上は聞いてこなかった。

その優しさが、今の私には余計に苦しかった。

日曜日。陸は朝から出かけていた。

一人でリビングにいと、余計なことばかり考えてしまう。

(……彼女できたら、私ここにいられないよね。早く仕事見つけて、出ていかなきゃ)

スマホで求人情報を必死に探る。

そんな時、大学時代の友人からメッセージが来た。

『ごめん急んだけど、今日の婚活パーティーで一緒に行くはずだった子がドタキャンしちゃって。代わりに来てくれない?』

(……婚活パーティー?)

普段なら断っていたと思う。

でも、最近ずっと胸を覆うモヤモヤとした気持ちに自分でも嫌気がさしていた。陸の電話のこと、好きな人のこと、考えたくないのに一人でいるとどうしても考えてしまうからだ。

(……私も関係ないところで出会い探してれば、この気持ちも誤魔化

せるかも)

そんな言い訳じみた思考を重ねて、私は友人の誘いに乗ることにした。

『行く』

手短に返信を送って、急いで準備をした。

会場は思っていたよりカジュアルな雰囲気で、友人と二人、それなりに楽しんで帰ってきた。何人かと連絡先を交換したけど、正直ピンとくる人はいなかった。

(まあ、こんなもんだよね)

特に収穫もないまま、陸のマンションに戻る。玄関のドアを開けると、リビングの灯りがついていた。

「ただいま」

いつもの調子で声をかけると、ソファに座っていた陸がこちらを

見た。

「おかえり。どこ行っとったん？」

いつもの軽い声で尋ねてくる。一瞬だけ言葉に詰まった。

（……別に隠すようなことじゃないよね？ 私たちは友達だし）

「友達に誘われて、婚活パーティー行ってきたんだ」

平静を装ってそう答えた瞬間、空気が変わった。

「……は？ 婚活パーティー……？」

「うん。一緒に行くはずだった子がドタキャンして、代わりに来て
って誘われたの」

「へえ」

陸がソファから立ち上がった。

「……ほんで？ どうやったん？」

「え……普通に参加して……連絡先とか交換したり……？」

「へえ。連絡先、交換したんや」

なんだろう。陸の声がいつもと違う気がする。

なんで私、責められてるみたいな気持ちになってるんだろう。

別に悪いことしてないのに。

「……婚活パーティーなんだし、いい感じの人がいたら連絡先くらい交換するでしょ」

嘘だ。全然ピンと来る人がいなかった。

「へえ」

陸の目が、ずっと細くなった。

「いい感じ……なあ？」

「……何、その言い方」

「別に。よかったやん、いい出会いがあったみたいで」

そう言いながら、陸の表情が冷たくなっていく。

「……なんで怒ってるの」

「怒ってるように見えるん？」

「めっちゃ怒ってるじゃん」

「……そう見えるんならそうかもなあ」

陸がこっちに歩いてくる。私はその雰囲気吞まれて思わず一歩下がった。

「……だ、だって、仕方ないでしょ。いつまでもここにいてるわけに
いかないし」

「なんで」

「なんでって……陸にも迷惑かけてるし」

「迷惑なんか思っへんて言うてるやん」

「でも……」

「婚活行って、他の男と付き合って、今度はその男ん家転がり込む」

ん？」

どこか挑発するような物言いだった。

「そんな言い方……」

「どんな言い方でも、それが事実やろ」

（……私のこと、そんなふうに思ってたんだ）

確かに陸にはたくさん迷惑をかけてきた自覚はあるが、男なら誰の家でも転がり込むような尻軽な女だと思われていたなんて。

そう思うと、悲しみが胸に溢れてくる。

「……もういい」

踵を返して、玄関に向かった。これ以上ここにいと、恩を仇で返すような言葉を浴びせそうだった。

「どこ行くねん」

「出てく」

「はあ？　こんな時間に？　行く場所なんかないやろ？」

「どこでもいいでしょ。陸には関係ない」

靴を履こうとした瞬間、後ろから強い力で腕を掴まれた。

「なんや、ほんまによその男んとこ行くん？」

（……また、そんなふうに……っ）

「……だったら何？　陸には関係ないでしょ」

振り返って睨みつけた。

——その瞬間、ふいに腕を引かれて、後頭部を掴まれた。そのまま強引に引き寄せられて、唇を塞がれる。

「……っ！」

強引に舌をねじ込まれて、息ができない。抵抗しようともがいても、後頭部を押さえられて逃げられない。

ちゅ♡くちゅ♡

玄関に、粘膜が交わり合う卑猥な水音が響く。

「ん、う……っ」

長いキスが終わって、ようやく唇が離れたとき、私は呆然と陸を見上げた。

「な、に……今の……」

返事はなかった。

代わりに、腕を引かれて、リビングに戻される。抵抗する間もなく、そのまま壁際まで追い詰められた。

「ちょ、待っ——」

「お前、俺のこと何やと思ってんの」

低く抑えた声が、鼓膜を震わせる。私を見下ろす瞳は氷のように冷たいものだった。いつも余裕そうに笑っている陸が、こんな顔をするとこんなんで見たことがない。

「俺の目の前で、他の男と連絡先交換していい感じとか、よう言えるな」

額に落ちた前髪の間隙から覗く瞳が、責めるように私を射抜く。

「だ、だって……」

「それで？ 俺のこと嫌になったから出て行って他の男とこ行くやて？ ……ふざけんなや」

低い声で囁かれて、背筋が凍る。

「……だって、それが一番いいでしょ？ 陸には好きな人がいるって……私がここにいたら邪魔になるから……」

「……はあ？」

陸の目が、一瞬だけ呆れたように細められた。

（……だって事実じゃない……毎日のように電話するくらい、いい感じの子がいるくせに……）

私がここにいてるせいで陸が先に進めないのであれば、出ていくしかないじゃない。

「お前ほんまに……」

呟いて、深くため息をついた。

「……もうええわ。どうせ言葉で言っても分からへんのやろ」
陸の指が顎を掴んで、無理やり視線を固定される。

「——なら、体で分からせたる」

「え……んっ！」

また唇を塞がれた。

優しさのかけらもない、怒りをぶつけるような、そんな荒々しいキス。

舌を絡め取られて、何度も深く口内を犯される。

じゅる♡んちゅ♡れろ……♡

(……逃げなきゃ……っ)

両手で陸の胸を押し返そうとするけど、腰をがちり抱え込まれていて離れられない。

じゅる♡んちゅ♡れろ♡れろ♡

(だめ、力が入らない……っ)

ようやく唇が離れたとき、私は酸欠で頭がぼうつとしていた。

「もう友達でおられへんくなってもええ」

熱を帯びた目が、私を見下ろしている。

怒りだけじゃない、もっと違う何か、その瞳の奥で燦るように燃えている。

こんな目をする陸を私は知らなかった。

「今日でお前のこと、俺のもんにする」

その言葉の意味を理解する前に、体が宙に浮いた。

「きゃっ………！」

お姫様抱っこをされ、バランスを崩して落ちないように思わず陸にしがみついた。それに満足したように、陸はリビングを横切って歩き出す。

（陸、どうしちゃったの………？　こんなのダメ………早く、逃げなきゃ………でも、どこに………？）

ここは彼の家だ。どこにも逃げ場などない。

「ちょ、どこに………」

「分かるやろ」

その足が向かう先にあるのは——陸のベッドルームだ。

「待って、待ってってば………！」

「待たへん」

ドアが乱暴に開けられる。暗い部屋の中、窓から差し込む夜景の

灯りだけがぼんやりと室内を照らしていた。

そのまま部屋の奥まで運ばれて、大きなベッドに降ろされる。

起き上がろうとした瞬間、両手首を掴まれて頭の上で固定された。

「……っ」

見下ろしてくる陸の目は、どこか興奮したように熱を帯びている。

怒りなのか、それとも別の何かなのか、私には分からない。

「……ずっとこうしたかった」

耳元で低く呟かれて、心臓が早鐘を打った。

（……え？）

「……な、にそれ……」

「お前がこの家来てから、ずっと……」

「陸……？」

「同じ屋根の下で寝て、お前の作った飯食って、笑ってるお前見

て」

陸の顔が近づいてくる。

「どんだけ俺が抑えてきたか、分かるか？」

「……何言って……」

「知らんよな。お前はいつもそうや」

唇が耳に触れるほどに近い。

「俺のことなんか、なあんも見てへんねん」

囁くような声なのに、ぞっとするほど熱がこもっていた。

いつもふざけてばかりの彼からは想像できない、低くて重い声。

ぞくり、と背筋が震えた。

「……見ようとせんよなあ？」

その声は、責めてるようで、どこか寂しそうに聞こえた。

（何、その言い方……まるで……）

まるで、ずっと私を見ていたみたいなの。

考える暇もなく、熱い吐息が耳にかかった。そのまま耳朶を甘く噛まれて、小さく声が漏れる。

「ん……っ」

（なんで……なんでこんなこと……）

頭がぐちゃぐちゃになる。

大学で出会ってから、ずっと一緒にいた。大切な友達だと思っていたのに。

私たちの関係は、こんなことで壊れてしまうの？

そう思うのに、耳に触れる陸の唇に、抗えない。

「……んっ」

「ここ、弱いん？」

「ち、が……っ」

「嘘やろ。めっちゃ反応ええやん」

舌先で耳の縁をやさしくなぞられる。ぞわぞわと、背中を何か
這い上がるような感覚。

れろ♡ちゅ♡と、濡れた音が耳に響く。

「や、あ……っ」

「ええ声」

「やめ……陸、だめ……っ」

「だめって言われたら、もったしたなるわ」

ちゅ♡れろれろ……♡

「ひ、あ……っ♡」

（なんで……だめ……こんなこと止めなきや……）

そう思うのに、体だけは正直に反応して、熱くなっていく。

「ん、う……陸、も、やめ、て……」

「やめてほしい？」

「……っ」

「ほんまに？」

耳から唇が離れる。ほっとしたのも束の間、すぐに首筋に移動してきた。

「耳イヤやった？　じゃあこっちにしよか」

「あ……っ」

首筋を舐め上げられる。そのまま鎖骨を辿るように唇が這って、肩口に歯を立てられた。

「痛っ……」

「痕、残ったら困るやんなあ？」

「こ、こま……」

「まあ残すけど」

有無を言わず、肌の柔いところを強く吸われる。

じゅるっ♡じゅるっ♡

「ん、あ……っ」

吸われた箇所がじんじんと熱を持つ。たぶん、赤くなってる。

「……これでちよっとは、他の男のところ行く気失せたとちゃう？」

（やだ……なんで、こんな……っ）

陸が何を考えているのかわからない。それが恐かった。

「それともまだ足らへん？」

首筋、鎖骨、肩。

次々と唇が落ちてきて、そのたびに強く吸われる。

「や……っ、そんな……いっぱい……っ」

「いっぱいっけな、すぐフラフラするやろ」